

「研究」再考（１） ～自分の研究を語る～

こんにちは、大阪大学キャリアセンターの家島明彦と申します。今回から４回にわたってコラムを担当することになりました。よろしくお願いいたします。

まずは簡単に自己紹介を。専門は……所属学会が２桁なので自分でも何と云うべきか迷いますが、最近は「生涯発達心理学(Life-span Developmental Psychology)」と公言していることが多いです。研究テーマは、ざっくり言うと「青年期の自己形成」です。もう少し詳しく言うと、「現代青年の理想自己の諸相、および、その形成プロセス」です。具体的には、現代青年が憧れる理想の生き方とはどのようなものか、誰・何に影響を受けてそのような理想を描くに至ったのか、について質問紙やインタビューで量的・質的に調査してきました。「キャリア」という語を使うなら、「キャリア・ナラティブ」や「キャリア・ロールモデル」の研究と表現することもできるかもしれません。

このように、自分の研究を語る時、様々な方法があります。所属学会から学問分野・専門分野・研究領域を説明しようとする人もいるでしょう。学術的な専門用語やキーワードを使って自らの関心を表現しようとする人もいるでしょう。具体的な調査対象や調査方法、分析手法でもって研究の概要を伝えようとする人もいるでしょう。「○○の研究」と一言で簡潔に表現できたら楽ですが、なかなか難しいかもしれません。なぜなら、○○に入るべき言葉も「理論」、「方法論」、「(具体的な)対象」、「(抽象的な)概念」など様々な次元のものが考えられるからです。

自分の研究を他人に説明するとき、あなたなら、どのように話しますか？

この問いは、「他人」が誰なのかによって答えが変わってくる可能性があります。同業者に説明するとき、専門外の人に説明するとき、小学生や幼稚園児に説明するとき、それぞれ語り方が異なってくることでしょう。しかし、語り口が変わっても、語っている内容は変わっていないかもしれません。それこそが、あなたにとっての研究の本質なのではないかと思います。

今回は「自分の研究を語る」ということを通して、自分が研究に対して暗黙裡に抱いている先入観やイメージ、研究において重視していること、などについて省察していただき、気づいて自覚していただくことを狙いとしています。そもそも「研究」とは何か、定義や意義も大切ですが、「自分にとっての研究」について、改めて考えてみてください。Let's 「研究」再考。

(大阪大学キャリアセンター 家島明彦)